

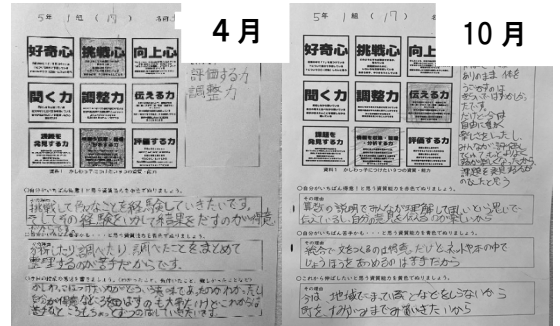
# 5年1組の実践

出嶋 志津子(体育科)・木村 元威(理科)

## 1. 5年1組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の共有

### (1) 理解

9つの資質・能力の内容を理解するため、4月の総合開きの時間において9つの資質・能力を確認した。どんな力があるのかを生活場面や学習場面で見られる具体的な姿で示し、児童が「めざす姿」を明確に思い描けるようにした。また10月にも前期の生活場面や学習場面で見られた9つの資質・能力を確認するとともに、自分の得意な9つの資質・能力や苦手な9つの資質・能力をふり返った。更にこれから伸ばしたい9つの資質・能力を記述させた(資料1)。具体的な場面を定期的に戻ったことで、児童は9つの資質・能力の意味やめざす姿を的確にとらえ、学習における「自分の成長の方向性」を明確にしていくことができた。

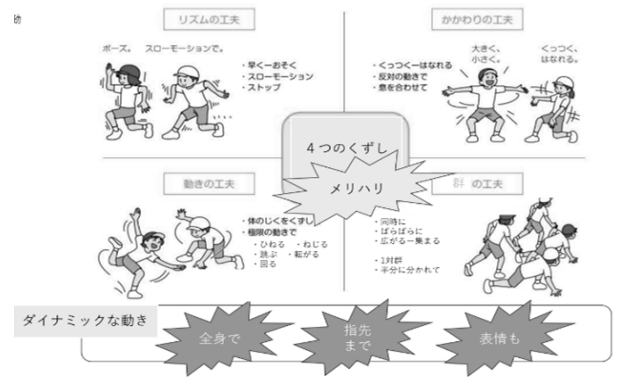


資料1 9つの資質能力の理解

### (2) 意識化・省察

体育科「表現運動」の単元において、挑戦心を発揮するための学習方法を共有する授業を行った。スポーツの題材から主な特徴をとらえ、表したい激しい感じを簡単なひとまとまりの動きにして踊ることをねらいとした。しかし高学年では自己の心身を解き放してイメージの世界に没入してなりきることに、恥ずかしさや抵抗感をもつ児童が多く見られる。単元前のアンケートでも「踊ることが好きか」という問いに対して「嫌い」と答えた児童が80%であり、その理由としては「上手く踊れないから」「思ったように踊れないから」「恥ずかしいから」等があった。表現運動や踊ることに対して前向きにとらえていない児童が、スポーツの激しい感じを表現するために、いろいろな動きを試し、仲間と協力しながら踊ることができるようにしたいと考えた。

単元の導入では流行りの曲や楽しい曲で踊ることの楽しさを味わせるとともに、表現運動でつきたい9つの資質・能力を共有した。前単元のマット運動において、できなかった技を易しい場で試したり、補助を付けて試したりしながら、仲間と協力しあきらめずにやりきることで、技を習得することができた。その学習経験をふり返り、表現運動でも挑戦心を高めていくことを「意識化」させた。



資料2 4つのくずしの工夫

本単元では、表現運動の4つのくずし(リズム・動き・かかわり・群)の工夫(資料2)を毎時間一つずつ意識させていった。さらに4つのくずしの工夫は二〜三つに絞って提示した(資料3)。提示した工夫は、児童にとって動きやすく、多様な動きを試しやすく、見ていてもわかりやすい工夫とした。例えば、かかわ

次	4つのくずしの工夫	提示した工夫・動き	ウォーミングアップ	全体の場での題材
第一次	②	ダイナミックな動き	新聞紙になりにきる	
	③		ペーパーアップメント	バレーボール 卓球 サッカー バスケットボール
	④		マジックハンド	ラグビー
第二次	①	ストップ・スローモーション	ボールになりにきる	円盤投げ
	②	跳ぶ・転がる・回る	ミラーリング	ボクシング
	③	ミラー・反対	コピー	
	④	同時に・順番に		

資料3 4つのくずしの工夫とその展開

りの工夫を習得する時間では、「ミラー（同じ動き）」「反対の動き」の二つの工夫を獲得させることをねらいとした。また心身を解放して表現することが難しい児童が、いろいろな動きを試せるように、毎時間物や人とかかわりながら動くウォーミングアップを取り入れていった。ウォーミングアップにも、4つのくずしの工夫の要素を取り入れ、その後の展開につなげられるようにした。そうすることで表現運動が苦手な児童も、友達や先生を見て動くことができ、無意識にダイナミックに動いていた（資料4）。



資料4 反対の動きを取り入れたウォーミングアップ

ウォーミングアップで習得したい工夫を取り入れた動きを経験した後、全体の場で教師が口伴奏でリードしながら児童と一緒にスポーツの動きを工夫していった。さらにその後、グループで選んだスポーツの動きを児童が工夫していくといった1時間の授業の流れにした。そうすることによって、児童はいろいろな動きを試し、児童同士でひと流れの動きを創ることができたのではないかと考える。かかわりの工夫を習得する時間でも、跳ぶ⇔転がる、速い⇔スローモーションなど、いろいろな反対の動きを試しながらグループで選んだスポーツの激しさを表現していた（資料5）。



資料5 グループでの反対の動き

A児は単元の初めのリズムダンスでは、「下手だから恥ずかしい。」とふりかえりに記していた。しかし、いろいろな動きを試す中で「友達と一緒にいろいろな動きをすると楽しくて上手くできると思った。」とふり返り、単元の終わりには「いつもよりたくさんの動きを取り入れ、回る、転がるなどダイナミックな動きになった。」と記していた。A児はダンスへの苦手意識から、初めは動くことができなかったが、友達と一緒にいろいろな動きを試すことで楽しさを感じ、グループで激しい感じを表現する動きを考えダイナミックに動くことができるようになったと考えられる。

B児も単元の初めのリズムダンスでは、「少し嫌な気持ちや不安な気持ちがある。」とふりかえりに記していた。しかし単元が進むにつれ「友達のいい動きを見つけて、まねすることができた。群の動きで激しい感じを出せた。最後はこれまでの動きを組み合わせでダイナミックに表現したい。」とふり返っていた。単元の導入では、B児はダンスへの苦手意識や恥ずかしさからほとんど動くことができなかったが、友達の動きを真似ていろいろな動きを試すことで、最後にはよりよい動きを模索している姿が見られた。

「省察」の場面では、これらの児童の姿を挑戦心が育った具体的な姿として価値付けた。挑戦心が育った理由を問うと、「友達と一緒にいろいろな動きをしたから」「友達のいい動きをたくさん見つけて真似したから。」といった発言があった。このことから、学級全体で挑戦心を発揮するための学習方法として「いろいろな動きを試す」という言葉で共有した。

理科「物のとけ方」の単元において、挑戦心を発揮するための学習方法を共有する授業を行った。

本単元では、前時までに食塩やミョウバンを中心に、質量の保存性や温度変化による溶解量の変化を比べる活動を通して、物の溶け方についてとらえる学習を行っていた。その過程で、食塩やミョウバンだけではなく、様々な溶質を試すことで、一つの実験方法だけではなくいくつも試しながら確かめていくことのよさを実感していた。

本時では、児童が調べたい溶質や溶媒を選び、自ら見付けた課題に対して、物の溶け方について学んだことを生かして様々な実験方法を試し、粘り強く他者と関わりながら問題解決しようとする事ができることをねらいとした。授業の冒頭では、前時にそれぞれのグループで考えた実験計画や仮説（資料6）をふり返り、何をどのように確かめていくかを共通理解した。続いて挑戦心をつけていくことを伝え、発揮してほしい9つの資質・能力を児童に「意識化」した。これにより、本時の問題解決の際に児童が自分たちの立てた計画をもとにして、様々な実験方法を試しながら課題解決していこうとする児童の姿を引き出そうとした。児童の実験計画を見ると、溶媒を選んだグループでは食塩やミョウバンを溶かすことができるか検証するにとどまり、温度変化による溶解度の変化を検証しようとする計画まではあまり見られなかった。そこで活動の見通しをもたせる段階で、自分たちの計画に沿って実験が終わったら考察することに加え、もっと試してみたいことを見付かった場合は教師に相談して試してよいことを伝えた。そうしたことで、計画通りに実験を終えたグループの中から、もっと調べてみたいという意欲を高め、さらに探究していこうとする姿が見られた。



資料6 実験計画と仮説シート

C児は、アルコールには食塩やミョウバンが溶けると予想しエタノールを用いて実験に取り組んだ。しかし予想に反して食塩もミョウバンも全く溶けなかった。そこから「温度を変えれば少しは溶けるようになるのではないか」と仮説を立て、グループで話し合い、追加で実験を行った。エタノールは火に近づけると燃える危険があることを十分に理解し、安全に配慮しながら実験に取り組む姿が見られた（資料7）。その結果温度を変化させても全く溶けない様子から、エタノールでは食塩やミョウバンを溶かすことができないことを考察していた。



資料7 実験に取り組む姿

D児は、油には食塩やミョウバンが溶けると予想し実験に取り組んだ。しかしこちらもエタノールと同様全く溶ける様子が見られなかった。温度を変化させても溶ける様子が見られなかったことから、油には食塩やミョウバンは溶けないことを考察する中で、「もしかしたらほんの少しだけでも溶けているかもしれない」と考え、「一度に入れる溶質の量を減らして実験をしたらいいのではないかと」さらに調べたい方法を見付けていた。D児は水酸化カルシウムが水にどれだけ溶けるかを実験していたが、温度を変えても溶ける様子が見られなかった。こちらも「一度に溶かす量が多すぎるから溶けていないように見えるのではないかと」考え、一度に溶かす量を変えて実験したいと願いをもつようになった。それぞれの児童が、自分たちの計画に沿って実験を行う中で、さらに試してみたいことを見付け、その方法を考える姿が見られた。これらの姿は、どうすれば解決できるかを考え、課題解決のためにいろいろな方法を試してみる姿であると言える。

「省察」の場面では、これらの児童の姿を、挑戦心を発揮した具体的な姿として価値付けた。挑戦心を発揮できた理由を問うと、「燃えるかと思うと怖かったけれど、調べたいことをしっかりと試すことができた。」「予想とは違って全く溶けなかったから、どうすればいいか考えて実験に取り組んだ。」という発言があった。このことから、挑戦心を発揮するための学習方法として、「いろいろな方法で試してみる」

という言葉で共有した。このように、挑戦心を「意識化」し発揮された場面を「省察」することで、学習方法として明確に共有できた。

### (3) 汎用化・見える化

体育科「表現運動」の単元で挑戦心を高める学習方法として、「いろいろな動きを試す」を共有した。また「走り幅跳び」の単元でも挑戦心を発揮するために「いろいろな場を試す」を共有した。より遠くに跳ぶために、ペアで動画を見返し「助走」「踏み切り」「空中姿勢」「着地」のどれが課題かを明確にした。その上で自分の課題に合った練習の場を選び、何度も試すことで記録を更新していった(資料8)。また、算数科「分数のたし算・ひき算」の単元では、挑戦心を発揮するために「いろいろな方法を試す」という学習方法を共有していた。分母の異なる分数の計算を解くために図や数直線、式や言葉などいろいろな方法を試しながら考えた。そうすることで、はやく・簡単に・正確に解く方法を見つけていったことを「省察」し、得た学習方法である。さらに理科「物のとけ方」の単元で挑戦心を高める学習方法として、「いろいろな方法を試す」を共有した。理科では「流れる水のはたらき」の単元でも「いろいろな方法を試す」学習方法を共有した。水害で壊れない川を作るためにはどうすればいいか、それぞれの班でモデル実験を行った。与えられた道具を用いて、どうすれば水害で壊れなくなるのか、道具の置き方や設置方法、組み合わせ方などいろいろな方法を試しながら実験に取り組むことができたことを省察し、得た学習方法である。いろいろな教科で得た挑戦心を発揮するための学習方法を児童と一緒に汎用化し、「いろいろな方法を試す」という学習方法にまとめた。



資料8 いろいろな場で試す姿

このように各教科で得られた具体的な学習方法は、省察時に付箋で記録し、9つの資質・能力の周囲に掲示した。そこから得られた汎用化された学習方法は、「試行」段階で教師が提示したり、「習得」段階で児童が目的に応じて選び取ったりすることができるように各学習方法のカードにマグネットを付けることで、見える化した。

## 2. 成果と課題

9つの資質・能力を常に掲示し、児童と「意識化」・「省察」をくり返していくことで、学校生活だけでなく家庭生活においても「挑戦心が高まった。」など9つの資質・能力を使った文が多くの子どもの日記で見られるようになった。自分の成長を具体的にふり振り返り価値付けが見られたことは成果だと考えられる。一方で一つの資質・能力を高めるにはいろいろな要素が絡み合い、「どのような学び方でその力を育てたのか」と考えることが難しかった。体育科の「表現運動」でも、挑戦心が高まった要素として「いろいろな動きを試す」「友達と動きを見合う」「よいところを伝え合う」「アドバイスし合う」「友達を真似る」などがあつた。それらは授業をはじめ学校生活においても大切にしているものであり、当たり前になっている要素も多かった。また、「よいところを伝え合う」ことは調整力の「自分と違う考えでもよさを見つけている」や、聞く力の「自分の考えと比べながら聞いている」や、評価する力の「目標と照らし合わせて何ができるようになったかわかる」といった他の9つの資質・能力とも関連付くと思われ、児童と整理することができなかつた。当たり前になっているものであるからこそ「意識化」とともに、児童と絡み合う様々な9つの資質・能力についても整理していくことが今後の課題である。